大学出版

'93 夏

No. 18

大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses

大学出版部協会

大学出版
18号

Summer・1993

政治のなかの大学出版 ―――― 箕輪　成男　1
――国際コミュニケーション・宗教改革・産業保護――
読書の周辺　国際化された源氏物語の読者 ―――― 井上　英明　7
教育放談 ―――― 秋山　仁　13
――学校が生き残るために――
大学出版部ニュース ―――― 18
新刊案内'93・4～'93・6 ―――― 23
製作の現場から ―――― 表3

表紙イラスト　ヨースト・アマン『職人図鑑』より
大学出版部協会マーク・デザイン　道吉　剛
本冊子中の表示価格は税込みです

政治のなかの大学出版部

―国際コミュニケーション・宗教改革・産業保護―

箕輪成男
（神奈川大学教授）

1　イギリスモデルの大学出版部はなぜ生れたか

大学出版部とその歴史に関心をもつ者が、未だに明快な回答を与えられていない一つの疑問がある。十六世紀イギリスにはじまったとされるオックスフォード、ケンブリッジ両大学の出版部に該当する大学出版部がヨーロッパ大陸諸国で出来なかったのはなぜか、という疑問である。これら両大学出版部はその後十九世紀の末に始めてアメリカに後続者を見出すまで、実に三〇〇年以上にもわたって孤立を続けたのである。一体両大学出版部はいかなる歴史的必然によってその誕生を見たのであろうか。それともそれは全く歴史的偶然の産物だったのであろうか。イギリスと大陸と、大学出版部の存否を決めた要因は何なのであろうか。

2　ヨーロッパ学問共同体の解体と継続

中世ヨーロッパに於て古代ローマの言語（ラテン語）と文学遺産の上に学問共同体を形成していたのは教会と大学であった。中世ヨーロッパの大学は、教会の精神的ならびに財政的優位の下で極めて神学的な環境を形成していたのであり、大学と教会は表裏一体であったといえる。大学の中でも神学部が最も強力であり、そこへの教師の供給源も卒業生の就職先も教会であったから、今日の日本の仏教系大学とは比較にならぬほど宗教的であったろう。教会の言語はラテン語であったが大学もまたその用語はラテン語であった。教科書も講義も日常生活もすべてラテン語で行われていたのである。それはヨーロッパ全域の学問の世界が単一の言語で運営された最初にして最後の経験であった。やがてユマニストの活動、ルネッサンスの息吹の中で学問に対する関心が市民の間に拡がると、そうした状態に対する不満が増大する。国内において学者と非学者の間にコミュニケーションの障壁が存在し、学者と非学者が分裂して存在することは、どう考えても不自然だから、当然の反応であった。

こうして各国で十六世紀頃からそれぞれの国語が成立し、聖書や古典の自国語化や、辞典の編纂出版がはじまる。学問の国際コミュニケーション的観点からは理想的とも言える中世ヨーロッパの国際的学問共同体はこうして解体され、ナショナリズムの方向に次第に進むことになるのだが、キリスト教とラテン語という共通の基盤は一朝にし

て消え去ることはなかった。今日に至るまで西洋の大学はこの靴帯の上に、中世ほどではないにしても学問共同体を維持し続けているのである。

3　出版後進国イギリス

十五世紀にはじまる初期印刷家たちの出版活動は、こうして一方で学界共通語としてのラテン語による出版から、自国語出版への漸新的移行の状況下ではじまるのだが、この時期イギリスの出版業界は国際競争上大変弱い立場に置かれていた。

グーテンベルクにはじまる印刷術は短時日のうちに全ヨーロッパに拡まり大陸各地に有力な出版者を生み出した。十五・十六世紀の出版書籍とくに学術書はまだ圧倒的にラテン語出版であり、それは学問共同体を形成するヨーロッパ全域に販売された。その場合、孤立した島国で社会的経済的に後進地帯であったイギリスの出版者が、大陸市場の中心地にあって有利な商業活動を展開するフランスやドイツの出版者に対抗出来なかったことは当然である。今もそうであるように、出版はいつの時代でもマーケティング、販売こそが命なのである。その上イギリスは学術出版に必要な活字や印刷用紙までも大陸からの輸入に依存しなければならない状況にあった。だから大陸の出版者に対抗して大陸に販売するどころか、逆に大陸から流入する安い本にいかにして対抗するかが大問題であった。

こうした事情の下ではじめロンドンの書籍業者として活躍したのは外国人であった。大陸の書籍業者が大陸の本を持ち込んで売っていたのである。

やがてロンドンの書籍業者から外国人が法的に締め出され、国内業者の保護の動きが強まる。産業保護の上からもまた思想統制の上からも書籍業者を管理統制する必要があることを痛感した宮廷政治権力による出版統制政策の強化である。一五五七年にはこうして書籍業組合に勅許が下り、過当競争を避けるための印刷の独占が認められた。そしてロンドン以外での印刷は禁止されたのであった。

他方オックスフォードとケンブリッジの二つの大学町では、それに先立つ十五世紀の末、十六世紀のはじめ頃から散発的に書籍印刷が行われ、さらに一五三四年にはケンブリッジは勅許によって書籍印刷を許可されたのである。

こうして一見矛盾する勅許がその時々の政治的動向の中で出された結果、イギリスの出版業史はロンドン対両大学の対立抗争を一つの軸として展開することになるのだが、その動きを正しく理解するためには、先ず当時とその後における学問と大学と出版活動の歴史的位相関係を確認しておくことが必要である。

残念ながら紙幅の制約によって今その詳細を論ずることはできないが、要するに大学出版部は十七世紀にはじまる近代自然科学や社会科学の発展とは殆ど無関係であったということである。大学は研究の場と言うよりは、もっぱら貴族・富裕階級子弟の教養教育・職業教育（法律・医学・

神学）の場であり、そこでの教育内容は古典の注釈を主体とした伝統的学問であったのだ。言い換えれば新興の科学に拠る人々を支え、その成果を発表して来たのは王立協会・アカデミー・学会といった大学以外の組織であり、大学出版部はなすところがなかった。大学出版部がこれらの学問に奉仕するようになったのは二十世紀以後のことである。

4　印刷革命と検閲

十五世紀のなかばに印刷技術が確立された結果、学問の世界に変革がもたらされた。学問と大学が、教会と固く結びつけられていた中世ヨーロッパにとって、聖書等宗教書のテクストの正確さを守ることが、学問の中心命題であったから、印刷以前の写本時代にあっても、例えばパリの本屋とか写本屋は大学の管理下におかれ、テクストの正確さと値段の両面について管理を受けたのである。

後に印刷時代に入ってから、ユマニストと呼ばれる人文学者たちが、宗教の呪縛から解放されて古典の復活を展開した時に、彼等もまた古典テキストの印刷――ギリシア語、ラテン語の原典や各国語を経ての翻訳テキスト――に対して、同じように正確さを要求した。さらにはそうした姿勢は、法律書や歴史書にまで及ぶのである。

印刷技術は往々にして、その能力の一面、すなわち高速度の複製能力――量産性にばかり注目が集中するが、実はもう一つの側面、一度確定されたテクストが誤謬の入り込む余地なく複製されるという正確さの方が当初は重要であったことが見失われ勝ちである。しかし、まだ学者の少なかった初期印刷の頃に、量産とそれによる価格の相対的低下が、必ずしも一義的重要さをもたなかったことは、当時の印刷部数が二〇〇～三〇〇部であったことからも推測できよう。

ところで、こうしたテクストの正確さの維持が、写本時代にあっては極めて困難であることは言うまでもない。テクストに拠るべき基準版も標準版もないのだから、学者間の議論を同じ土俵の上で行うこと自体が難しいのである。一方印刷によって基準になるテクストが固定化され、学者が共通のエディション（テクスト）を手にするようになると、学者間の論争舞台は一挙に拡大する。以前は狭い大学の枠の中でしか存在しえなかった論争が、テクストを手にする人々すべてに拡がったのだ。すなわち印刷革命が学者間の関係を変えたのである。

こうしてテクストが再編成されて確立し、それにもとづいて用意される参考図書（レファランスブック）が編集されるようになると、学者間の情報交流は促進され、学者・研究者の枠が大学という狭い枠組みを越えることになる。一方生産される書物のテクストに対する検閲は、写本であれ印刷本であれ、教会と王権と大学にとって極めて重要な作業であったが、その重要性は印刷によって一層決定的となった。検閲の失敗は大量の異端書の流出・伝播を意味し

たからだ。

5　パリ大学と出版

十三世紀の創建になるパリ大学もまた上述した中世大学の典型的な見本の一つであった。伝統的学問の教育の場にほかならなかったのだ。

思想の自由や表現の自由は、はるか後世十八世紀の概念である。それ以前の神学が支配していた中世大学では、異端を排除し、正統的な解釈を確立するためには、聖書や教科書の正確さ、正統性が重要だった。また、学生の利益を守るためには、本の値段を妥当なものにすることが必要だった。だからパリに於ても本屋や写本所は、大学の管理下に於てのみ、営業が認められた。大学の認めた本以外は売ってはならず、値段も大学の承認したものであることが必要であった。印刷の時代になっても事態は変わらなかった。面白いことに、書籍業は十三世紀以来一六一八年に至るまでは、フランスでは産業機構の中に組み込まれておらず、教育システムの一部と受けとられていた。書籍商や初期印刷家は、パリ大学でも地方大学に於ても、その立場はまるで学生課の職員か、大学の雑用係、教授の召使といった風なものであったのだ。本屋だけでなく、製紙家までもが、一五三八年迄は大学の管理下に置かれたのである。

しかし、印刷書籍の販売が商売として有利なものになるにつれて、その拡大を願う書籍業者にとって、大学の検閲は歓迎すべからざるものとなり、次第に彼等は、大学に代わる検閲・許可機関として、議会の方を向くようになる。重箱の隅をほじくるような検閲をダラダラと長引かせられては商売にならなかったからだ。一方十六世紀宗教改革内戦期には、大学の検閲や管理では、政治目的にとって不十分なことが明らかとなり、曲折を経て、印刷出版人のギルドによる、自己規制システムへと転換する。

このようにして、フランスに於ては、大学は十七世紀のはじめに至るまで、大学周辺で営業する書籍商たちを、大学の教育システムの一部として、受入れつつ、それを管理し、出版書の検閲と販売価格の統制を行ったが、書籍商・印刷人の経営そのものに介入することはしなかった。印刷術は、その革命的機能によって、既に見た如く学問の世界の一大転換の萌芽を内包していたのだが、大学当局にとって、かつての写本屋が出入り業者であったごとく、印刷所もまた出入り業者に過ぎず、彼等が必要な書物を製造してくれる限り、その正確さと価格のみをチェックしていれば、大学の目的に足りると考えていたのであろう。

そしてパリの出版者の経済的立場は強かった。伝統的学問を教育するための教科書は、ほとんどラテン語であり、伝統的学問のセンターであったパリの出版人は、出版したラテン語の教科書を、ヨーロッパ全域に売ることができたからである。

6　一五二〇年代のサイバーク

学問と大学との関係に於ては、フランスとほとんど変わることのなかったイギリスではあったが、大学と出版の関係については、イギリスはフランスとは異なる経過をたどることになる。

ケンブリッジ最初の印刷家、サイバークがこの町に印刷所を開いたのは、一五二〇年のことである。彼はここで一〇点のラテン語の本、その他若干を印刷するが、その経営は二〜三年しか続かず倒産する。このサイバークと大学の関係が、どのようなものであったのかは、必ずしも明瞭でない。写本時代以来大学が書籍業者を管理し、書籍業者は大学の機構の一部と見なされて来たのは、フランスにおけるのと同じであったが、印刷についてはまだ揺籃期で、取締規則は成立していなかったのだ。サイバークは一五三四年以前の段階で良く見られたように、ゆるやかな意味で、大学の認可書籍商であったろう。

後に一五五七年の勅許により、ロンドンの書籍業組合（印刷・出版業組合）の設立が認められた時、印刷をロンドンに限ると言う条項が加えられ、イギリスでは多年、印刷・出版のロンドン集中が見られたのだが、一五二〇年の段階では、それ以前であったから、サイバークの事業は、ロンドンの書籍業組合や地元ケンブリッジの書籍業者の不満にも拘らず、開始し得たのである。

彼が大学から、当時としてはかなり巨額といえる二ポンドを借り入れたことが記録に残っており、それが、単なる書籍商以上の大学との結び付きを示していると思われるが、一五二三、四年には倒産して引き上げている限りでは、結局は、彼自身の責任による個人企業であったろう。

しかし、サイバークの印刷所を以て、ケンブリッジ大学出版部のはじまりとすることには、無理がある。サイバークの印刷所が倒産した後六二年間にわたって、ケンブリッジの町では全く印刷活動が行われなかったからだ。ケンブリッジにおける、真の意味での印刷所の開設は、一五八三年に実現した。一五三四年の勅許によって、ケンブリッジ大学は、大学のニーズに応えるために働く書籍販売業者（ステーショナー）、あるいは印刷業者を三人まで任命する権利を与えられた。この勅許による権能の下で、継続的に書籍販売業者が任命されて来たが、印刷の方は、すでにサイバークが倒産したように、地方都市では経営維持困難なため、有名無実で、実行が伴わなかったのである。何分当時のケンブリッジの学生数は、年に三〇〇人前後の入学で、町人口も数千人、印刷用紙の仕入れとか印刷した本の販売をロンドンに頼らねばならない状況下では、ケンブリッジの出版にメリットはほとんどなかったのだ。

そうしたケンブリッジで、いよいよ本格的に印刷が開始されることになった。その背景にあったのは、宗教改革下の政治的抗争であった。

7　ピューリタン派の拠点校ケンブリッジ

一五二〇年代にサイバークが活動した頃、ケンブリッジ

は宗教改革初期の一中心地であった。サイバーク自身、こうした改革派の招きによって移住したと見てよいだろう。一五八〇年代になると、これまでの改革に飽き足りない過激なピューリタン一派がケンブリッジ大学に於て発生する。一五八三年に大学が印刷人を指定した時、ロンドンの書籍業組合が干渉し印刷書籍の没収を以て脅かした背景には、書籍印刷産業の独占権の擁護という経済的理由と同時に、宗教戦争とそれにからむ政治的対立があったのだ。大学側、とくに過激派にとっては一五三四年の勅許を盾に、大学の印刷所を興すことは、政治的に対立するロンドン側の検閲を排除し、自派の出版の自由を確保するために有力な手段であったのだ。

ケンブリッジ大学とロンドン書籍組合の権利闘争が続行する中で、一五八四年に大学印刷人トマス・トマスの印刷した本が出版され、事実上ケンブリッジの印刷が始まるが、闘争はその後も続いた。

こうしてすぐれて政治的な背景から生み出されたケンブリッジの印刷所は、経済的必然性や可能性から生れたのではなく、経済外的理由が先行したものであった。後世それはケンブリッジ大学出版部のはじまりとされるようになったが、その実態は大学許可の御用印刷所といったものであり、決して近代的な組織を持った大学直営の出版事業ではなかった。大学印刷所というよりもむしろ大学印刷人が次々に任命され。それぞれ自己の経営責任において大学へのサービスを果したのである。大学にとって勅許を根拠に大学印刷人を任命し出版の自由を確保することが、大学の政治的立場を守るために絶対必要だったから、それらは大学印刷所の名の下に保護されたのであった。

一方フランスに於ては、大学と政治権力と出版産業の間に、イギリスの場合のような対立と抗争の関係がなかったから、大学あるいはその背後にある政治権力は、出版産業に対する検閲を実施するのみで足りると考えたのである。他方フランスの出版産業はラテン語書籍を全ヨーロッパに販売し、パリ大学への市場依存度が低かったから、その立場は大学に対しても相対的独立を維持し得たのであった。言い換えればフランスの書籍業者は大学出版人の指名を受けなくても痛痒を感じることなく出版活動を展開できたし、大学もまた自ら出版部を作って出版の自由を確保しなければならないといった、差し迫った事情にはなかったのである。

追記

大学出版部協会設立三十周年の記念号ということで大学出版部の歴史的背景を、現代に至るまで一貫して概観したいと考えたが、紙数が尽きてしまった。他日を期したい。

読書の周辺

国際化された源氏物語の読者

井上英明
（明星大学日本文化学部教授）

『源氏物語』は全体の五十四帖が完成したといわれる一条天皇の寛弘六年（一〇〇九）頃から、ただちに宮廷貴族間に流布し、以来一千年近く読み継がれて来た日本の代表的古典である。原文はすでに現代日本語からは遥かに遠いものとなったが、当今の読者には与謝野晶子、谷崎潤一郎、円地文子、田辺聖子諸氏の現代語訳もしくは抄訳で親しまれ、最近の若者には橋本治氏の『窯変源氏物語』が大いに迎えられて、カルチャーセンターや大学の公開講座などではかならずといってよいほど、聴講者を惹きつける。しかし、こうしたことはあくまでも原作、現代語訳を問わず、『源氏物語』の日本語による日本人のための享受の仕方であり、所詮は「国文学」の枠内にとどまるものである。

ところが二十世紀になって『源氏物語』は、その方法の主題、構造や思想、さらに美的理念そのものが、各々、歴史と民族、言語と習俗を異にする読者の理解を拒むものではないことが次第に立証されてきた。さらには『源氏物語』のもつ個性的＝日本的特殊性と類型的＝世界的普遍性の結合のなぞが議論の核心となってきている。とくに二十世紀後半の『源氏物語』の鑑賞や研究は、それが国際的規模においてなされつつあるところに、これまでの享受史とはまったく異なった特色があるといえる。著書や論文を通して発表される外国人の研究は、かつての異国趣味的な発想や、解説的レベルを超えて、いまや日本の専門学者の学説を取捨し、批判し、時としてこれをあえて無視し、彼等の文化的コンテクストに則っての独自の解釈も行われている。

もとよりこうした現状は『源氏物語』にとってよろこばしいことであって、決して忌避すべきことではない。なぜなら『源氏物語』が外国文化によって誤読され、多様な解釈をゆるすことは、原作のもつ豊饒さによる拡大化と深化を一方で保証しているからである。言いかえれば『源氏物語』が「世界文学」になりえたということである。そのことは具体的にどういうことか。真っ先に言えることはこの作品が日本語として制約から脱け出て、外国語の衣装をまとい、世界の読者に向って新しい旋律を奏で出した時点、すなわち外国人による受容の領域をも含めなければならない実情に立ち至ったということである。そこで『源氏物

語』の特殊的価値と普遍的価値を究明するためには、読者自身がなによりも『源氏物語』の原文を平安朝時代、より厳密に言えば作者紫式部の作品化された美意識そのものの内部を透視しえるものであると同時に、一方では完全に『源氏物語』の外側、すなわち翻訳された外国語の言語文化によるテクストに精通する努力が要求される。文学研究における国際的視野とは、そういう「作品」と「テクスト」の相関関係における「理解」という困難な状況を指すのである。

ところで『源氏物語』が外国語の衣装をまとったのは原作が完成されてから九七三年後の明治十五年（一八八二）、当時英京ロンドンに在った一人の日本人外交官の手によるものであった。駐英日本大使館一等書記官で、後、伊藤博文の女婿となり、近代日本の演劇界にも足跡を残した男爵末松謙澄（一八五五―一九二〇）である。「桐壺」から「絵合」の巻までで、惜しくも未完に終ったが、『源氏物語』の世界最初の翻訳、それも当時世界最大の版図を誇った大英帝国の言語であった。末松訳は

SUEMATSU, Kenchio.—Genjimonogatari. London, Trübner. 1882. pp. 253

である。この末松訳は『源氏物語』の享受史において画期的な仕事であったが、英語国民の読書間において評判はかんばしいものではなかった。英文そのものが重々しく、不自然な詩的言語が多すぎ、登場人物の官職・人名のローマ字表記にも滑稽に響く個所があるという批評である。だが、ここでいささか末松謙澄を弁護しておくと、この英訳出版当時のわが国語学界におけるローマ字表記の実情は、キリシタン渡来以来、西洋宣教師たちが耳に聞いた日本語の発音の各自己流の綴りのままで、ポルトガル、スペイン、オランダ、ドイツ諸式の混在状態であったこと――このことは末松謙澄という訳者名の表記を見ただけでも分ることである。「英文が重々しく、不自然な詩的言語が多すぎる」との評も、当時英国にあってヴィトリアン・イングリッシュの華麗な文体を学んだ末松にとってはいささかきつすぎる要求だと言うべきだろう。私などに言わせればこうした現代の西洋人からの批判は志賀直哉の文体をもって明治の尾崎紅葉などの美文調を非難するようなもので公平な批判とはいいがたい。末松訳を重ねて好意的に見れば、こうした英語そのものの文体面ではなく、とにもかくにも『源氏物語』が第一級の国際語である英語に初めて訳されたこと、さらには、その「序説」で紹介されている原作中の「蛍」の巻の「物語論」の意義である。すなわち、紫式部がロマンスの作家として自己の天分を理解していたことに触れ、この発言が坪内逍遥の『小説神髄』の三年前あったことである。

末松訳の初版、Trüber 版は一九七四年、Terrence Barrow の解題付きで東京のチャールズ・E・タトル社から再版され、これに異議をとなえたアメリカ人学者もいた

が、すでに第五版を重ねている。ここで大事なことは紫式部と末松謙澄はいかに時代をへだてていようと、文化的には連続するパラダイムに帰属する「日本人」とであったということである。これは現代人が国際化、情報化の波間に見失いつつある素朴な事実であるといってよい。なお、末松訳には当時の英国人の手が加わっていることは確実で、同年に出たチェインバレンの英訳『古事記』よりもはるかに流暢で読みやすい英語だという評もあり、英語圏やキリスト教文化圏からの悪評を真に受けて末松訳の意義を過少評価すべきではなかろう。

× × ×

ところで、『源氏物語』が世界文学として真に国際的評価をかちえることに成功したのは今世紀に入ってからで、訳者はアーサー・ウェイリー（一八八九―一九六六）である。

WALEY, Arhur. The Tale of Genji. 6 vols. (1925―33) London. Allen & Unwin. pp.1135.

アーサー・ウェイリーはいかなる人であろうか。隠者のごとき学匠詩人、今世紀英国における第一級の東洋学者といわれてきたが、死後、三十年を経た現在もなお片言隻語の逸話が伝えられるのみで、その全貌を窺うすべもなかった。近時、ウェイリーの正確な伝記や東洋学の業績が研究の対象となり、その出現の英国文芸思想上の意義が詳細に論じられるようになってきた。管見ではつぎの二著が最もすぐれている。

Perlmutter, Ruth. Arthur Waley and His Place in the Modern Movement between the Two Wars. Ph. D. dissertation. of Pennsylvania, 1971.

宮本昭三郎『源氏物語に魅せられた男―アーサー・ウェイリー伝』（『新潮選書』一九九三年三月刊）

× × ×

アーサー・ウェイリーの英訳『源氏物語』はたんなる東洋的異国趣味の好事家の手すさびではなく、両次世界大戦間の英国文壇におけるモダニズム運動から生まれたのである。『源氏物語』の世界はすでに保守頑迷のヴィクトリア朝における伝統的価値観と鋭く対立するもので、おおまかに言えば当時の文壇や思想界の社会主義への傾斜とは対極をなす唯美主義運動をささえたものだと言ってよい。ウェイリーが直接属したのはいわゆるブルームズベリー・グループといわれる知的エリートのサロンであったが、その雰囲気は隠健な無神論と耽美の世界が結合したもので、主としてケィンブリッジ大学出身者で占められ、作家のヴァージニア・ウルフ、美術評論家のクライブ・ベル、経済学者のケインズ、哲学者のバートランド・ラッセルなどが異色のメンバーであった。ウェイリー英訳『源氏物語』の反響はまさに驚異的で、『誤解―日米欧摩擦の解剖学―』の著者E・ウィルキンソンによれば、「一九二〇年から四〇年までの間に日本をテーマにした作品でヨーロッパのベストセラーになったのは、ただ一作、アーサー・ウェイ

リー訳の『源氏物語』があるだけ」だったと言う。実際、当時の書評を見渡すと、例えば、『ミーミンガム・ポスト』紙は「驚異にあたいする作品」だとして迎え、「この出版は顕著な文学的大事件である」とし、『マンチェスター・ガーディアン』紙もまた「英語国に移された稀有の傑作の一つ」としてウェイリーの訳業をたたえ、『源氏物語』を「世界最大の小説の一つ」と数えあげた。さらに『モーニング・ポスト』紙は「天才の作品。歴史物語の九女神のひとつと主張されてもよいのだが、歴史としても、諸々の時代を通して変わることのない、興味溢れる絶妙な人生絵巻として、一層よく愛読されるだろう」と『源氏物語』のもつ真の古典性、小説的特性、および世界性を認めた。さらに『ネーション』誌は「レディ・ムラサキが大小説家たるのあらゆる資質―想像・機知・良識・愛すべき措辞・大規模な物語に対する把握力、人間の性格に対する共感的にして周到な眼などを有していたことは明瞭である」と、紫式部の作家的資質と才腕をたたえ、『源氏物語』が世界の十大小説のひとつになることを断言した。一方、『T・P・ウィークリー』誌は「レディ・ムラサキの心理描写はマルセル・プルーストの心理描写のごとく近代的で、その機知はジェーン・オースチンの機知のごとく鋭敏である」と評して、紫式部が世界最古の、そして最大の心理小説家であり、その手法の近代性と世界的優位性を力説している。これらの書評は文芸批評紙として最も権威ある『ロンドン・タイムズ』紙文芸付録がより総合的に絶賛したことで、ウェイリー『源氏』の評価を決定づけたといえる。この辺の消息はすでに岡一男博士の『源氏物語事典』（春秋社刊）の第十二章「世界文芸史上の位置」で詳説されているので、是非参考にしていただきたい。

ウェイリー訳の影響からの批評はその後も断続的に英語圏の文芸事典や著作の中に発見される。代表的なものとして、カッセルの『エンサイクロペディア・オブ・リタレチュア』の「ノーヴェル」の項を執筆したデニス・ソーラット教授によれば、「レディー、ムラサキはフロイトよりもいっそう分析的であり、それゆえ偉大な小説家たちの領域にあって、プルーストと同じくらい、あるいはそれ以上のすぐれたサイコロジストだと大方は言うかもしれないが、メレディスやロレンスよりも確かにすぐれている」と述べ、西洋近代小説の概念を転倒させんばかりの筆致である。さらにアメリカのジョン・D・ヨハナン教授はその著『アジア文学の宝庫』において、「原作の日本語そのものの内部に存在する長所によるものか、あるいは訳者（ウェイリー）の創造的天才の功徳のためか、いずれにしても『源氏』は十九世紀と二十世紀のヨーロッパの偉大な小説に比肩する地位を獲得している」と述べた。

また、中国ではウェイリー訳完結後いちはやく周作人が「『源氏物語』は中国における長篇小説発達に五百年先立つ一部の唐朝の『紅楼夢』というべきで、唐朝文化の豊富

さを以てして、この光栄を藤原の女士に奪い去られたのは、一奇跡である」（『日本文化を語るの書』一九三六）と言っている。

ウェイリー訳のこうした成功はそれ以来、各国語への翻訳をいっせいに促すこととなった。現在、世界のメイジャー・ランゲージに翻訳された『源氏物語』は左記の通りである。

まず、ウェィリーの英訳そのものの向うを張って、原作によりストレートな態度で訳されたものに、

SEIDENSTICKER, E. G. The Tale of Genji, 2 vols. Secker & Warburg London. 1976. pp. 1090.

訳者は平安期文学ではすでに『蜻蛉日記』、近代文学では川端康成、谷崎潤一郎ほか多数の作品の翻訳を手がけてきた米国の日本文学研究の大御所的存在である。ウェイリー訳の流麗な古典的律調の物語的文体に対してこの翻訳はより現代的、小説的文体の創造に成功したもので、一九八〇年「ペンギン・ブックス」廉価版に入った。アメリカ英語が主流の当今の若い読者には将来はこちらの方が好まれるかもしれない。この翻訳そのものについてはハーバード大学の

EDWIN, A. CRANSTON, "The Seidensticker's Genji" Journal of Japanese Studies, Vol. 4. No. I, 1978.

で、原作を厳密な比較検討がなされている。しかし、いずれにしてもその後の他国語の翻訳はウェイリー・サイデンステッカーの英訳の影響が強く、その意味でこの両英・米訳出現の意義は甚大である。もっとも独訳、

BENL, Oscar. Genji-Monogatari, die Geschichte vom Prinzen Genji Zurich. Manesse Verlag, 1966. 2 vols.

が、原作からの直接訳としてドイツ語文化圏で読まれているが、この訳の当否については、ウェイリー訳との対比において、学問的研究がなされている。（URY, Marian, The Imaginary Kingdom and the Translator's Art: Notes on Rereading Waley's Genji—Journal of Japanese Studies vol. 2, NO. 2. 1976）またフランス語の完訳は SIFFERT, René, LE DIT DU GENJI. publications orientalistes de France, 1988. がある。さらに中国語訳としては豊子愷『源氏物語』上・中・下（人民文学出版社一九八〇—八二）と林文月『源氏物語』上・下（中外文学月刊社・国立台湾大学外文系転、一九八二）の二本があり、韓国語訳としては柳呈『源氏イヤギ（物語）』上・下（乙酉文化社刊、一九七五）が完成している。こうした『源氏物語』の世界各国への翻訳とその意義についての最近のそれぞれ各国の専門家による研究は、近刊の今井卓爾他編『近代の享受と海外との交流—源氏物語講座9（平成四年、勉誠社刊）に網羅してあるので、これまた是非読んでいただきたい。

世界の中の『源氏物語』の先鞭をつけたのはアーサー・ウェイリーであったが、その本格的研究もやはり英語圏がすぐれている。実際、研究史の長さ、研究者層の厚さ、戦

後の日米関係からいって、『源氏物語』の研究は現在アメリカが主導権を握っている。欧州の他の国々やロシア、さらには中国大陸や台湾や韓国などではようやく本文の完訳が出揃ったところである。各々の言語文化的背景の差異から『源氏物語』の享受が多様なものとなっていくのはあたりまえのことである。世界各国の国語で愛読される『源氏物語』はそれぞれの文化的自画像の中で思い描かれるからである。アーサー・ウェイリーが紫式部の『源氏物語』の中に自分自身が背負ってきた英国文化の自画像を思い描いたように。

原作に自国の文化の自画像を思い描く過程が実は、翻訳という行為、あるいは翻訳を通しての読書体験に他ならない。英語の「翻訳」に相当するラテン語には「反逆者」という意味の語源がある。したがってこの語の訳語ははじめ「反訳」で行われていたが、いつしか「翻訳」に落ちついた。あまり言われていないことだが、翻訳という行為こそは原作を隅なく理解しようとする一層深刻な読書体験の再現である。翻訳家なるものは原作に対する最も忠実な読者であると同時にこれに見事に反逆するものである。

ロラン・バルト風に言えば、読者には二種類の態度がある。一つは「読者的読者」。一つは「作家的読者」。前者は原作をありのままに読む学問的態度であり、後者は原作を作者的に破壊創造を繰り返しながら読者自身の文化的コンテクストの中に読み変えていく態度で、作家的、創造的、脱構造的である。前者が原作の忠実な僕(しもべ)なら、後者は美しく、あるいは酷くく裏切る浮かれ女である。例えばウェイリーの英訳『源氏物語』などは紫式部の原作を最も美しく裏切った名訳である。『源氏物語』を漢訳で読むと中国語の飛び石のような語順からわれわれはピアノ協奏曲を聴くようであり、アーサー・ウェイリの流麗な英文からヴァイオリン・ソナタを連想する。どちらが原作に近いかなど問うのも無駄であろう。それぞれ中国や英国の文化に原作は音律を変えて新たに蘇っているからである。異文化間の言語文化には一種の「不可共約性」incommensurability が存在するというのはこのことを指すのである。傑出した翻訳に言語学的正確さ、機械的逐語訳など期待すべきではない。英訳には英国今世紀前半のモダニズム運動の唯美的世界があり、豊子愷の漢訳もやはりモダニズムの中に中国語文化に即した信・達・雅の要諦を達成しようとしているからである。

『源氏物語』の言語学的翻訳は大学の研究室を満足させるが、その文化的翻訳は至難の業である。だがこの至難の業への挑戦のなかに変容する『源氏物語』の豊饒な古典的多様性があるといってよい。

教育放談

――学校が生き残るために――

秋山仁
（東海大学教育研究所教授）

●教育ってなんだ●

私は数学の世界で四〇歳位まで格闘を続けてきたが、才能が無かったので苦労した。それでもなんとか、それなりの仕事をしてきた。そして、四、五年前から芸能界に半分身を転じ、ビートたけしやルー大柴、東ちづるといった、いわゆる芸能人たちとも付き合う機会を得た。彼らの中に、学者や教育者があまり持っていないすばらしい才能があることにも気がついた。

人々に感動を与えたり、喜びを与えたり、笑いを与えたりできる。また、テレビの画面からは想像もできないほど礼儀正しい。しかし、こういった才能や個人の資質は今の学校教育のなかでは評価しにくいものである。

実を言うと、実際に友達付き合いするまでは、たけしのことを「変なやつだなー」と思ってて大嫌いだった。しかし、付き合っているうちに彼の素晴らしさがわかった。頭の回転は速く、思いやりがあり、何十人と人間がいてもきちんと気を配っている。「たけし軍団」なんていうでしょ。彼は、箸にも棒にも掛からないッパリたちをちゃんと教育してる。

「お笑いウルトラクイズ」で熱海に二泊三日のロケに行ったとき、しつけがしっかりしているのに驚かされた。朝、食事に行ったときも、どんなに売れていない芸人であっても、先輩には礼儀正しく接して、みんな挨拶を済ませてからでないと箸を持たない。これもりっぱな教育だ。彼らは、たけしのこと、殿！、殿！　って呼んで敬愛してる。

大学の先生も、学生たちに敬愛されなきゃいけない。その先生の講義には、眠くたって目をこすりこすり、何時間も電車に揺られて講義に出て、先生が来る前にみんな立って待ってて、っていうような。そんなものは夢物語だって言われるかも知れないけれど、授業を受けるっていうのはこういうことだろう。

私はいろんな世界を歩いてきて、教育というものは、なにも学校だけではなくて、他のところにもかなり芽生えているんだ、ということがわかるようになった。高校・大学教育にもそれらのいいところを取り入れなければいけない。

ところが、いままでの学校教育というものは、どうも学力的に優れた生徒を育成してきただけのようであり、しかも、かなり片寄った学力に重点が置かれてきたように思え

る。中学校や高校で大問題になっている業者テストにしても、偏差値だけに頼って、生徒の評価はもちろんのこと、学校の評価までが下されている。これが教育かと思うと情けなくなる。

●ハードからソフトへ●

学力というものには二種類ある。一つは、いままで入学試験や学科の試験で重要とされてきた、もしくは評価基準とされてきた「知識」や「技術（テクニック）」。偏差値教育ではこれらの学力しか評価できない。それに対して、もう一つ、知識とは違った、つまり「考える力」とか「創造していく力」といったものも、やはり学力である。前者を「ハードな学力」と呼び、後者を「ソフトな学力」と呼ぼう。いままでの中学校から大学までの教育は、ハードな学力に焦点が合わされてきた。

「学力による評価は、客観的で公平である」というのが唯一の拠り所なのだろうが、それは単に1点刻みで評価したり序列をつけるのが簡単であるということであって、すべてに絶対公平なんていうことは有り得ないし、実際、弊害もたくさん報告されている。

たとえば、日本の数学教育についていうと、中学生の数学力は世界で一位、高校生は世界で二位である、というデータがある。ある意味ではとても優秀だといえるわけだが、はたしてそうであろうか？

研究能力とかオリジナリティを試すバロメータとしてノーベル賞を考えてみたときに、アメリカは今までに二一二名のノーベル賞学者を出しているのに対して、日本はノーベル平和賞まで含めて一〇名しか出していない。すなわち二十一分の一である。アメリカの人口が日本の倍だとしても、ここには人口とは別の要素を考えないわけにはいかない。つまり、高校までの教育によってハードな学力は世界のトップレベルであるにも関わらず、独創性とか創造性といったソフトな学力があまり身についていないということを物語っている。

また、国際数学オリンピックの日本代表選考会には、数学に自信のある学生が全国から集まってくるが、最終選考五、六人に残るのは、とくに有名でもない地方の県立高校の生徒だったりする。もちろん、有名進学校の生徒も平均的には高いレベルにあるのだが、最終選考には残らない場合が多い。日本の教育は、この点だけに焦点をあわせれば、大いに改善の余地があるといえるだろう。

もう少し掘り下げて分析すると、「学力は重要である」という命題はある意味においては当然正しいけれど、その学力の意味しているものが何なのか、つまり「ハードな学力」なのか「ソフトな学力」なのかが問題視されるべきである。そして、ここでの主張は、学力というものをハードからソフトに変えなければいけないということなんだ。

ここに、一つのデータとして企業偏差値というものを考えてみた。偏差値を悪者扱いしている私ではあるが、ここ

では偏差値を悪用ではなくて逆手にとって、ある種のパロディーとして大学の評価を考えてみた。

これは、その企業の新入社員の出身大学の偏差値を、採用人数で加重平均して得られるものだけれど、こんどはその企業偏差値を使って、何人の学生がどの企業に採用されたかというデータから、大学の別の偏差値が逆に求められる。詳細はここでは述べないが、収集したデータからかなり厳密に計算をした。一部の例のみを表に示す。

つまり、一般に偏差値といわれているものは、大学に入学するときの偏差値（入口偏差値）のことであるが、ここでは大学を卒業するときの偏差値（出口偏差値）を考えて、各大学の入口偏差値と出口偏差値の差を問題にしようと思う。ここで、

出口偏差値－入口偏差値
＝偏差値変化量

とすれば、この偏差値変化量の値が大きい大学は、優れた教育を行っているという一つの目安になるだろう。私が言うと自慢になるが、東海大学はこの値がかなり大きい。

ここでもやはりソフトな学力観を養うことが重要であり、単なる知識の詰め込みは必要ないと思う。ハードな学力の基本的なところだけが理解できていれば、数学にしても文学にしても、考える力、創造する力を重点的に養うべきである。だから、いかに素晴らしい入学生を集めるか、ではなくて、いかに素晴らしい卒業生を送り出すか、というところに高校や大学は重点を置くべきだろう。

企業偏差値より求めた大学の偏差値

	東京大学	日本大学	東海大学
入口偏差値	68.9	61.5	58.9
出口偏差値	65.0	63.9	63.8
偏差値変化量	−3.9	2.4	4.9

●学力よりも人格を●

では、人は社会のなかで何が必要とされるか、社会は何をそれぞれの人間に期待しているのか、ということを考えてみよう。そうすると、もちろん学力もある程度要求されるだろうが、そのほかにも、責任感、協調性、思いやりとか優しさ、バイタリティー、たくましさ、などというものも重要だ。ところが、英・数・国・社・理のような学力だけではそういう能力は測定できない。

すると、「素晴らしい人間」の判定基準を何に求めたらいいのかが問題になってくる。「勉強できる人が良い人とは限らない」ということはだれでもわかっている。要は人間性を問題にするのである。

では、実際にどんな人間が素晴らしい人間なのかというと、それは感性が豊かな人だろうと思う。ちょっと頭の回転は遅くても、豊かな感性を持った子は人間として素晴らしく成長できると思う。逆に感性が豊かではない人、つまり鈍感な人は、仕事も学問も恋愛もうまくいかないだろう。極端な言い方をすれば、「すばらしい人間とは女にモテる人間」ともいえるんだ。この言い方に語弊があるのな

ら、人に好かれる人間といってもいいだろう。
だから、女子高校生または女子中学生に、「あのお兄さんって、見た目は別として、優しくて知性的ですてき!!」と言われる人間を育てるべきである。

●人格を評価できる入試方法●

けっきょく、人格でもってその人を判定しようというのが私の主張である。さっきから言っているように、「素晴らしい人間」とは、学力優秀もその一つの要素ではあるけれど、そのほかにも、思いやりがあるとか、責任感が強いとか、協調性があるとか、嫌な仕事を進んでやるとか、まだまだたくさんの要素がある。それらを反映したり見抜くことができる試験はないのだろうか？

たぶん「小論文」などは、その簡単な例だろう。六〇〇字ぐらいの小論文でも、詳細な点数を付けて序列を決めることはできないが、上・中・下ぐらいの判定は明確にできる。そして、それで上の部類の受験生は入学させてもいいんじゃないかと思っている。または、五人一組でディスカッションやディベートをやらせて、自分の意見を堂々と言える子や理論の展開がうまい子、こういう受験生には入学を認めていいと思っている。採点・評価する先生も一人ではなくて、多くの分野の先生に評価してもらって、数学の立場からはこういう生徒がほしい、とか、体育の立場からはこういう生徒がほしい、という方法があってもいいだろう。

さらに、高校や中学の三年間でどんなふうにクラブ活動に参加してきたか、ボランティアでなにをやってきたか、天体観測でなにをやってきたか、植物観察でなにをやってきたか、近所の子とどういう付き合いをしてきたか、といったことも評価するべきだ。そして、町で「この子はとても勇気があって、いい子だ」と言われてる受験生は入学を認めてもいいと思う。たとえ数学なんかできなくても。

これらの意見は荒唐無稽に響くかも知れない。それに、実行するためには大変な手間暇がかかるだろうけれど、これからはそういう方向性も考えなくてはいけない。じっさい、アメリカのある医大ではかなり時間と労力をかけて学生の選抜をしている事例もある。日本でも亜細亜大学の一芸一能入試はこの発想に沿うものである。

●理工系離れを防ぐ教育●

最近、大学受験生の理工系離れが大きな問題になっている。とくに理工系の学部が大きなウエイトを占めている大学は、眼前に迫った死活問題である。

全国的にみると、大学進学志望者で理工系への進学志望者は二三％というデータがある。以前は理工系と文系の志望者が、おおよそ五〇／五〇だったこともある。

ここでどういう問題が生じてきたかというと、大学側の受け皿としては五〇／五〇あるけれど、文系の方ばかりに受験生が集中し、競争率でいうと文系はすぐ三〇倍、四〇倍、理系はだいたい十倍以下という状況である。だから、現在かなりの大学で実施されている推薦入試を受けようと

する生徒に対して、進路指導の先生が「文系は競争率が高いから、きみの成績では推薦できない。数学科なら空いてるよ。」とか言って、文系志望者の中で成績の悪い生徒を理学部・工学部に入れたりしてる。まったく本末転倒な話だが、こういった問題が既に起こっているのである。

しかも今後就学人口が激減する状況の中では、俗にいう二流以下の私立大学は、教育の内容を充実させなければ、その存続さえ危うくなってしまうだろう。

つまり、何度もいうように、ソフトな学力を持ち、融通の効く学生を育てる。カリキュラムにも、観察力や表現力といった、アメリカやヨーロッパに比べて日本が弱いと言われているところの教科をたくさん取り入れて、ソフトな学力に長けた学生を育てていかなければいけない。

数学や理科の教育にしても実験をたくさん取り入れて、すべての学生を授業の中心に参加させるような授業をやるべきだ。東急ハンズあたりで材料を買ってきて、すべての学生が積極的に参加し、手を動かし、必用なら体も動かして、そして考える。そして、求める結果やそのからくりを理解するような教育が重要である。

こういう方法は「算数大好き」や「NHK高校数学」などで三年にわたって試みてきたが、その結果はけっこう好評のようだ。ということは、こういうことをやれば数学や理科への関心や興味が高まるということである。

これには、先生の研修が必要である。先生にとっては大変なことだが、学習意欲をそそり、生徒が積極的に参加する授業が行えるようになるだろう。そうすれば、学問の喜びを知った学生が大挙して大学の扉をたたくようになる。

先日、私の教え子、女の子なのだが、高校の数学の教員になった。その高校というのが、髪の毛ちりぢりにして、クサリいっぱいまいてるような生徒ばかりなのだそうだ。しかし、そういう生徒を相手に、従来の教師から生徒への一方通行的なものではなく、生徒の参加を促す実験中心の授業を毎日やっていると、生徒たちは身を乗り出し、目を輝かせて「センコー！　おもしれーじゃんか」などと言って、興味を示してくれたそうだ。

●楽していては学問はできない●

目的もなく、ただ大学に行ければいいと思っているような学生は、「文系の方が楽そうだから」とかいうイメージだけで学部を選んでいる場合がある。そういう学生は、何かよほどの動機付けや指導を行わないと、まさにエントロピー増大の法則に則って、堕落した学生になってしまう。

要するに、どんな状況であろうと鉄の意志を持って困難に立ち向かう姿勢が美しいという教育が十分になされていないために、楽な方向にばかりに目が向く。しかし、それではだめなんだ。けっきょく、そういう生徒は文系に行ったって大変だったらすぐ音をあげるだろう。高校・大学に限らず、困難を承知の上で難題に体当りしていく若者を育てる教育をしなくてはいけないと自らを戒めている。

北海道大学図書刊行会

▼田中彰・高田誠二編著『米欧回覧実記の学際的研究』（B5判・一〇三〇〇円）『回覧実記』は、その百科全書的内容により、ながらく学際的国際的視野からの研究の必要性が叫ばれてきた。本書は人文・社会・自然科学各分野の内外の専門研究者二〇人余が一〇年にわたって続けてきた研究会の精髄を集大成した、『回覧実記』のエンサイクロペディアともいえよう（日生財団助成出版）。

▼札幌弁護士会編『市民と歩む裁判官―ドイツと日本の司法改革』（四六判・一六四八円）ドイツ最高裁判所判事のキューリンクさんは労働組合員。全面ガラス張りの明るい裁判所へ、毎日、バイクで出勤します。一方、日本の裁判所と裁判官は……。「裁判官のあり方」をめぐる司法改革シンポジウムの全記録。

聖学院大学出版会

▼倉松　功『キリスト教信仰概説』四六判並製　一三六頁　定価一六〇〇円）。本書は、日本のプロテスタント・キリスト教の中で、最も多数をしめる日本キリスト教団の「信仰告白」を解説しつつ、プロテスタント・キリスト教信仰とは、どのようなものかを簡潔に示したものです。

▼聖学院大学・女子聖学院短期大学宗教センター編『神を仰ぎ、人に仕う―キリスト教概論』（A5判上製　三二八頁　定価一九〇〇円）。キリスト教大学、短大で信仰と教育的使命を自覚した十数名の執筆者によるキリスト教概論の授業の教科書として発行されたものです。

▼今回の新刊はキリスト教学校の「聖書科」の教科書を目的とするものですが、しんに適切な教科書の発行も当会の目指しているもののひとつであります。

慶應通信

▼『日米経済摩擦』（落合浩太郎著、二九〇〇円）一般によく理解されているようで案外理解されていない「日米経済摩擦」について、①その歴史と変化、全体像を提示、②理解の前提となる統計・数値を詳しく紹介、③政治学的な分析のみならず、経済学的な分析を行っている。「日米経済摩擦」の正しい理解およびバランスのとれた見方を学ぶための好適な書である。

▼『日本企業による欧米企業の買収と経営』（鈴木貞彦著、三八〇〇円）若干の日本企業がこれまでに実行した欧米企業の買収とその後の経営について、それらの企業の関係者の問題意識を調査したものであり、この経験と問題意識は、今後の日本企業の他国籍企業の買収に多くの示唆を与えるものである。

産能大学出版部

▼バブル崩壊で取引先の経営内容を知る必要性が高まっている。『経営分析に強くなる本』（宇角英樹著、二〇〇〇円）は、そうしたニーズに応える本だ。また、自社の経営体質を的確に判断し、経営計画に反映させるための手法としても経営分析は重要である。本書は、経理マンだけでなく、部門の担当者にも読めるように理解のポイントでは効果的な図を多用し、経営現場と経営数字の関連をつかみやすいように工夫したビジネスマンの必読テキストである。

▼『心の成長と仕事』（佐伯雅哉著、二〇〇〇円）は、ビジネス＝仕事が本来的に持っているより高次の目標（達成感、社会的貢献など）に向かうことが、人間の心の成長にとって本質的に必要であることを説いた、異色のビジネス書である。

玉川大学出版部

▼J・C・トレヴィン著／島川聖一郎訳『ハムレット劇場』著者は高名な演劇批評家であって、十代のころから、生涯のおわりまで、数多くの「ハムレット」を見てきた。およそ「八十五人のハムレット」（これが原題）に出会ったが、そのなかで心の奥底に「いまもしっかりと生き続けている」俳優は、ギールグッド、ミルトン、オリヴィエ、スコッフィールドであると記している……ただこの名優たちの舞台をひとつとして見ていないものには、残念ながら、ロをつぐんで著者の評価を拝聴するしか手はない。（朝日新聞）

▼本学教授今尾哲也氏が小部刊行『役者論語　評註』により、平成四年度芸術選奨文部大臣賞を受賞。鈴木由美子著『ペスタロッチー教育学の研究』が日本保育学会・保育学文献賞を受賞。

中央大学出版部

▼V・ビーチ／高島道枝・安川悦子訳『現代フェミニズムと労働〔女性労働と差別〕』（定価四一二〇円）　生産と再生産、資本主義と家父長制、性と階級との関係のように近年のフェミニストの思想家たちが没頭してきた一連の諸問題、とりわけ女性労働の構造変化に焦点をあて新しいパラダイムを刻み出した労作。

▼木田元・須田朗監修『哲学の探究』（定価二六七八円）　我々の常識や科学知の暗黙の前提をどこまでも疑い、掘り返し問題にしていこうという学問哲学は難しいと言われているが、本書は初学者をこうした哲学的なものの考え方に導き入れようというねらいのもとにまとめられたテキストである。哲学的思考に慣れ、興味をもち、哲学的に深くものを考えようとする人が一人でも多く生まれることを願う。

東海大学出版会

▼アムール河がオホーツク海にそそぐ。北からの寒気団がオホーツク海に吹きつける。そのとき海氷が誕生する。青い海原が白い氷原にかわる。オホーツク海と流氷の不思議を、絵と写真を交えてやさしく説き起こす。本書は、流氷の妖精〝クリオネ〟からの地球環境へのメッセージでもある。

青田昌秋著『白い海、凍る海』（A4判・六四頁・二〇六〇円）

▼旧ソビエト時代からロシア産業が抱える問題を、コンピュータ技術・軍事技術・原子力発電・航空機産業・宇宙開発などの個別の観点から検証。旧ソビエトの立ち後れの原因を分析。さらには、日本のCIS支援についても提言する。

松前達郎監修・日本対外文化協会編『ロシア産業の現状』（A5判・三八〇頁・二八八四円）

東京大学出版会

二一世紀が近づく。残された時間で二〇世紀を総括することは、世紀末を生きるわれわれの大きな課題であろう。

二〇世紀の総括、それはわれわれにとっての「近代」の意味を「二〇世紀」という時空のなかでとらえなおすことでありかつ、来たるべき二一世紀への「メッセージ」にほかならない。

姫田光義ほか著『中国20世紀史』（定価二八八四円）は中国という空間を足場に、この課題にとりくむ。

――二〇世紀の中国では何が変わり、何が生まれたのか。その一方で、三度の革命や戦争という激動を経るなかでも残りつづける「伝統」は何か。そして、中国にとっての「二〇世紀」とは何か。

本書のモチーフは大きく、魅力的だ。

東京電機大学出版局

▼複雑な現象を、より単純な現象に分解する数字的手法として以前よりフーリエ解析が物理や工学で広く用いられてきた。最近その欠点を補うより強力な手法として、ウェーブレット解析があみだされ、数学、物理の基礎研究から信号処理、情報等の工学的な応用まであらゆる分野で話題である。ファジー、ニューロ、カオスに続くブームを予想する声すらある。

▼小局が、出版予定を広告して以来、研究レベルの学術書（入門書とうたってはいるが…）としては、大変な反応をいただいている。やはり小局の出版がブームのはしりとなったニューロコンピュータを思い出す。地道な努力を続ける研究者にとっても一過性に終らない事を祈る。ウェーブレット入門（桜井・新井訳、A5、定価三三九九円）

東京農業大学出版会

▼『東京農業大学卒業生の農林業自営者名簿』東京農業大学OB農林業自営者名簿編集委員会編。

農業後継者問題は、現在の日本農業の最大の課題となっています。農大の卒業生にあっても卒業と同時に農林業の生産に直接従事するいわゆる農林業自営者は、年々減少しています。それでも、農大は最大の大卒農業者を社会に送り出しています。

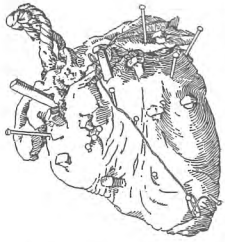
大学としては、大学とOB農業者とのネットワークを充実させるためにも『農林業自営者名簿』を整備し、急速に進展している農業技術はもとより、いろんな情報を積極的に交換・提供するための媒体にしようとするもの。

法政大学出版局

キース・トマス著／荒木正純訳

▼『宗教と魔術の衰退・上下』上下巻セット＝一万四九三五円

魔術――このまがまがしくも魅力的なるものの実態は何か。十六、十七世紀イングランドを中心に、当時の民衆生活における魔術の役割を詳細にわたって明らかにし、キリスト教による魔術の取り込み、魔術との対立や弾圧を描いて、宗教の本質をも抉り出す。ウルフソン文芸賞受賞の大著。訳者による口絵／キリスト教聖人解説／聖職者および教会関係用語解説を付す。



魔術をかけるために，釘やピン等が刺された羊の心臓

放送大学教育振興会

▼今春、刊行した八〇点の売行きの状況を見ると、心理学入門（相場覚）、英語Ⅱ〈93〉（比嘉正範・平賀正子）、保健体育―スタシオロジー（平沢弼一郎・臼井永男）、病気の成立ちと仕組み（鬼頭昭三）改訂版社会学入門（井上俊・大村英昭）をはじめ、改訂版中国語Ⅰ（傳田章）、乳幼児の人格形成と家族関係（三宅和夫）、教育心理学（原岡一馬）、改訂版憲法概論（樋口陽一）などが鋭い出足をみせている。

▼来春に刊行する七六点の原稿が集まりつつある。より正確でスピーディーな編集をはかるために、出版部では、若い二名の女性編集者を増員。

▼「全国どこでも、いつでも、だれでも学べる」放送大学の全国化にむけて、出版部・販売部とも、態勢づくりに急ピッチ！

明星大学出版部

▼高島秀樹著『日本の農村地域社会』（定価三五〇〇円）

本書はⅠ農村地域社会への視点、Ⅱ日本農村地域社会の基礎構造、Ⅲ戦後日本の農村地域社会の変化、Ⅳ現代日本の地域社会の5編から構成され、日本の農村地域社会の伝統的な姿と、第二次世界大戦後の変動、そして今日の実態と問題点を明らかにし、またそうした種々の考察を通して、今日の農村の実態と、問題点を明らかにした書である。

▼阿部宏著『渡欧体験の文学』（定価三〇〇〇円）

19世紀アメリカ作家たちを中心に――とサブタイトルがある様に、19世紀アメリカ作家たちの作品の旅をたどった書である。第1部（フィールド・ノート）11編、第2部（研究ノート）6編からなる。

早稲田大学出版部

ドイツ文学の行方を占う「シリーズ現代ドイツ文学」全5巻、①アデナウアー時代の文学（定価三〇〇〇円）②ゲルマーニアベルリンの死（定価二五〇〇円）③ドイツ語圏の女性作家（定価二四〇〇円）④廃墟から（定価三〇〇円）⑤女と男の変奏曲（定価二五〇〇円）が完結した。第4巻『廃墟から』は「…戦後ドイツの代表的著者を含めて、再出発という時代状況が生み出したこの文学的ドキュメントは、今日の再々出発の時代にとっても、極めて示唆的である」（平井正氏、産経新聞・3月8日付）との評を得た。全巻完結に際し、セットでのご注文をお勧めいたします。

名古屋大学出版会

▼I・ウォーラーステイン著／川北稔訳『近代世界システム1600-1750――重商主義と「ヨーロッパ世界経済」の凝集』（定価四九四四円）世界システム論の視角から資本主義史を再構成し、現代社会科学に圧倒的影響を与える著者のライフワーク第二巻の全訳（第一巻は岩波書店『近代世界システム』Ⅰ・Ⅱ）。

▼山下宏明著『平家物語の成立』（定価六六九五円）『平家物語』研究の第一人者が、新たに表現論的観点を導入し、テキストの古態と変遷を、それぞれの成立圏をも射呈に入れて考察した動態的な物語成立論。

▼苧阪良二他編『眼球運動の実験心理学』（定価六六九五円）眼球運動研究の歴史と最新の成果をまとめ、眼球はなぜ運動するのかを視覚との関わりで解明した、わが国で初めての成書。

京都大学学術出版会

『アルケー（関西哲学会年報）』（定価一五〇〇円、六月刊行）は、今年号より小会の発行となる。小会が係わる最初の学会誌である。本文に関してはさして苦労はなかったが、表紙まわりについて、苦吟している。雑誌の表紙は難しい。

さて、小会の図書目録〝初版〟だが、皮肉なことにこの数ケ月は既刊本をも凌ぐ勢いの注文数のため、品切寸前である。「初版本マニア」ならぬ、「目録収集家」のお目にとまったようだ。おかげでそろそろ作り直さねばならないが、夏～秋にかけて刊行する本が目白押し？　なので、グッドタイミングである。

近隣の、とある国立大学にも出版会が誕生し、刺激も増す今日このごろ。創業三年目の小会もいよいよ正念場を迎えることになりそうだ。

大阪経済法科大学出版部

▼『現代社会と唯物弁証法』（大阪経済法科大学哲学研究室・北京大学哲学系共編・四一二頁・四六三五円）

一九九一年八月一九日から二二日の四日間、北京大学で、本学哲学研究室と北京大学哲学系との共同主催による「第二回唯物弁証法シンポジウム」が開催された。一九八六年に開催された第一回シンポジウムから数えて三年、その間、東欧社会主義体制のあいつぐ崩壊や中国「天安門事件」が起こり、さらにはシンポジウムの最中に、旧ソ連のクーデターの報に接するという正に社会主義そのものが揺らぐなかで、日中両国の哲学者が、唯物弁証法について白熱の論議を展開した。本書はその成果である。なお、中国語版も北京で刊行される予定である。

関西大学出版部

▼岩見和彦著『青春の変貌―青年社会学のまなざし』（定価一三〇〇円）〈今の時代〉の申し子たる青少年が生きる現代という社会の磁場の構造を骨太に析出する青年社会学入門の書。青少年文化の特徴を「脱生徒化」「劇場都市」「おたく」などのキーワードで読み解きながら彼ら／彼女らとのコミュニケーションの可能性を探る。▼中島直矢・伴義孝著『スポーツの人大島鎌吉』（定価二〇〇〇円）スポーツ界は自らを省み、評価して世界観に基づく新しい行動を起こす時がきている。スポーツの本質を求めて闘い続けた泰斗は言う。五輪精神の平和運動・みんなのスポーツの世界的先駆者。第18回東京五輪を、日本へ初めてスポーツ科学を上陸させて大成功に導た先見の人。そのすべてを描く評伝の初登場。

九州大学出版会

▼森俊洋・中畑正志編『プラトン的探究』三〇九〇円。「われわれはどのように思索すべきなのか」。プラトンの哲学が、特定の形而上学的体系をたてることとはまったく別の思索の途を歩んだことを明らかにし、プラトンの思索のうちに哲学の普遍的なかたちが存在することを示す一一名の論文集。▼九州大学ドイツ経済研究会編『統合ドイツの経済的諸問題』三三九九円。EC統合と東西統合下のドイツにおける経済構造政策と構造調整指標に関する総合的研究―国際経済統合過程の横断面分析。▼宮松浩憲著『西欧ブルジュワジーの源流―ブルグスとブルゲンシス―』八二四〇円。草創期のブルジュワジーが、多角構造の中世都市を巨大な共同体へ発展させていく過程を、地域史の視点から多面的に解明する。

新刊案内 '93・4〜'93・6

（表示価格は税込みです）

■北海道大学図書刊行会

市民と歩む裁判官―ドイツと日本の司法改革　札幌弁護士会編　一六四八円

新版　北海道の花〔増補版〕　鮫島惇一郎・辻井達一・梅沢　俊　二六七八円

熱輸送論　石黒　亮二　三六〇五円

金融の原理〔増補版〕　浜田　康行　三〇九〇円

生態学からみた北海道　東正剛・辻井達一・阿部永編　九七八五円

Biodiversity and Ecology in the Northernmost Japan　東　正剛・大沢　晃・金川加奈編　九二七〇円

■聖学院大学出版会

神を仰ぎ、人に仕う―キリスト教概論　聖学院大学・女子聖学院短期大学宗教センター編　一九〇〇円

キリスト教信仰概説　倉松　功　一六〇〇円

■慶應通信

新版　経済原論　千種　義人　三九〇〇円

新しい時代の社会像　藤川吉美／周　暁燕　一九五七円

アフリカ　その政治と文化　小田英郎編著　四一二〇円

西洋経済史（近世）　寺尾　誠　一七〇〇円

西洋経済史（中世）　寺尾　誠　一五〇〇円

日米経済摩擦　落合浩太郎　二九〇〇円

日本企業による欧米企業の買収と経営　鈴木　貞彦　三八〇〇円

一九世紀ヨーロッパ音楽―作曲家たちの書簡・手記主要作曲家創作期比較年表―　徳永　叡春　三〇〇〇円

福祉のこころと教育　伊藤　隆二　二五〇〇円

不登校児が問いかけるもの　須永　和宏　一七〇〇円

中国哲学への招待　周　暁燕　二二〇〇円

■産能大学出版部

経営分析に強くなる本　宇角　英樹　二〇〇〇円

社長の経理学　市川　利夫　二〇〇〇円

心の成長と仕事　佐伯　雅哉　二〇〇〇円

使ってよかった小型光ファイル　玉井　清之　一五〇〇円

あなたはかならず成功する　マーフィー理論研究会編著　一五〇〇円

営業プレイングマネジャー目標必達法　山口　博康　一六〇〇円

天分を磨く　石井　憲正　二〇〇〇円

エッ！　上手な破産　伊藤　博　一五〇〇円

バブル以後の「もう一つの経営」　小林　宏　二三〇〇円

日米小売新勢力のコンセプト&デザイン　内田　武之　二二〇〇円

売れてしまう「しくみ」づくり　加藤　雄詞　一五〇〇円

ビジネス・コミュニケーションの基本が身につく本　中村安治／中村則之共著　一六〇〇円

■玉川大学出版部

玉川児童百科大辞典（全21巻）　小原國芳監修　一五二〇〇〇円

玉川教育　玉川学園編　七二一〇円
学校劇選集①　岡田陽・落合聰三郎編　三二九六円
学校劇選集②　岡田陽・落合聰三郎編　三二九六円
学校劇選集③　岡田陽・落合聰三郎編　三二九六円
大学の理念　H・ガダマー他／赤刎弘也訳　二四七二円
日本とドイツ　教育の国際化　天野　正治　四九四四円

■中央大学出版部
韓国法の現在（上）　小島武司／韓　相　範編　四五三二円
ヨーロッパ裁判制度の源流　小島武司他編　二六七八円
労使関係法制の比較法的研究　塚本　重頼　二二六六円
続　歴史のなかの多国籍企業―国際事業活動研究の拡大と深化―　A・タイコーヴァ他／浅野栄一他訳　三二九六円
法律家を目指す諸君へ―一九九三年度版―　中央大学法職講座運営委員会編　二〇六〇円
現代フェミニズムと労働〔女性労働と差別〕　V・ビーチ／高島道枝他訳　四一二〇円
参加民主主義の思想と実践　佐竹　寛　四三二六円
日本的経営と「合理化」（改訂版）　松本　正徳　二八八四円
哲学の探求　木田元・須田朗監修　二六七八円

■東海大学出版会
アインシュタイン、ひとを語る―序文を中心に―　金子　務・板垣良一編　二四七二円
副腎・性腺疾患の臨床　有森　茂・勝岡洋治・岩本晃明・岩崎克彦　二八八四〇円
物理・工学のためのルベーグ積分入門　松浦武信・高橋宣明・吉田正廣　一八五四円
日本語初級Ⅰ　カセット　東海大学留学生教育センター編　二〇六〇円
日本語初級Ⅱ　カセット　東海大学留学生教育センター編　二〇六〇円
ロシア産業の現状―旧ソ連邦崩壊の構造と再生への道―　松前達郎監修／日本対外文化協会編　二八八四円
続　老いの構図　太田　保世　二〇六〇円
心臓〈超音波診断要覧Ⅴ〉　東海大学病院超音波検査室編　六三八六円
セネカ自然研究（全）―自然現象と道徳生活―　茂手木元蔵訳　特価七八八〇円
白い海・凍る海―オホーツク海のふしぎ―　青田昌秋　二〇六〇円

■東京大学出版会
島嶼に生きる〈オセアニア1〉　石川榮吉監修　三〇九〇円
概説日本経済史　近現代　三和　良一　二四七二円
居住福祉の論理　早川和男・岡本祥浩　四三二六円
知と不知―プラトン哲学研究序説―　松永　雄二　五三五六円
包括的社会哲学　山脇　直司　二六七八円
地球温暖化の経済分析　宇沢弘文・國則守生編　三九一四円
日本〈東アジアの国家と社会6〉　猪口　孝　二四七二円
東京大学年報　第一巻　東京大学史史料研究会編　二二六六〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇37　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇37　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇38　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
枢密院会議議事録55・昭和篇13　国立公文書館所蔵　一四四二〇円
文化と技術〈アジアのなかの日本史Ⅵ〉

ライフサイクル〈東京大学公開講座56〉　荒野泰典・石井正敏・村井章介編　三九一四円
家計簿からみた近代日本生活史　有馬朗人著者代表　二四七二円
社会理論の新領域　厚東洋輔・今田高俊・友枝敏雄編　中村隆英編　九二七〇円
コミュニケーションの共同世界　杉浦克己　三七〇八円
アメリカとロシア〈比較政治Ⅱ〉　升味準之輔　三六〇五円
アメリカ連邦体制の確立　中野　勝郎　三九一四円
伝統に生きる〈オセアニア2〉　石川榮吉監修　五九七四円
情報機器技術〈東京大学機械工学1〉　畑村洋太郎　三〇九〇円
ジェットエンジン概論　J・L・ケルブロック／梶昭次郎訳　三二九六円
コンピュータ地球科学　笠原順三・友田好文　七七二五円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇38　国立国会図書館所蔵　三七〇八円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇39　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇40　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
枢密院会議議事録56・昭和篇14　国立公文書館所蔵　一六四八〇円
エリクソンの人間学　西平　直　一四四二〇円
戦後日本の経済改革　香西泰・寺西重郎編　五三五六円
日本の技術革新と産業組織　後藤　晃　四七三八円
日本の工業化と鉄鋼産業　岡崎　哲二　三七〇八円
現代日本の政府間財政関係　今井　勝人　四九四四円
日本経済〔第三版〕　中村　隆英　三九一四円
現代の生命保険　刀禰俊雄・北野実　三六〇五円
健康の理論と保健社会学　園田　恭一　二五七五円
日本社会の新潮流　直井優・盛山和夫・間々田孝夫編　三七〇八円
21世紀日本のネオ・コミュニティ　蓮見音彦・奥田道大編　四一二〇円
日本の地質　木村敏雄・速水格・吉田鎮男　四三二六円
首都圏の水　高橋　裕編　八二四〇円
産業システム経済学〈東京大学機械工学2〉　長尾　高明　三九一四円
東京大学年報　第二巻　東京大学史史料研究会編　二六七八円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇39　国立国会図書館所蔵　二四七二〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇41　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇42　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
枢密院会議議事録57・昭和篇15　国立公文書館所蔵　一六四八〇円
　　一四四二〇円

■東京電機大学出版局

電気通信概論（第2版）〈理工学講座〉　荒谷　孝夫　二六七八円
無線工学A　1・2陸技1総通の徹底研究横山　重明　二四七二円
チューリングオムニバス第4巻―計算機科学の応用―　A・K・デュードニー／足立暁生訳　一九五七円
たのしくできる　やさしい電源の作り方　西田和明・矢野勲　二〇六〇円
「気」を科学する　町　好雄　二〇六〇円
textbook The Pascal　古東　馨　二七五〇円
ウェーブレット入門〔数理科学〕　チャールズK・チュウィ／桜井明・新井勉訳　三三九九円
電子回路通論下〈理工学講座〉　中村　欽雄　三九五〇円
情報史・情報学　小山田了三　二四〇〇円
電気・電子・情報系の基礎数学Ⅰ―線形数学と微分・積分―

SPICEによる電子回路設計　安藤豊・松田信行　二七八一円
John Keown／町好雄監訳　三六〇五円

■東京農業大学出版会
入学試験問題と解答例―東京農業大学―（平成五年・四年度）
東京農業大学出版会編　一三〇〇円

■東京理科大学出版会

■法政大学出版局
精神分析の系譜―失われた始源―
M・アンリ／山形頼洋・他訳　四九四四円
近世ドイツ哲学論考―カントとヘーゲル―
浜田義文・牧野英二編　五九七四円
戦後社会運動資料・第3回配本『社会主義』全三巻
法政大学大原社会問題研究所編　全三巻セット　七九三一〇円
――特別定価七二一〇〇円＝本年10月末日まで
不可解な秘密―自然のための、そして自然に抗する戦いとしての科学―　E・シャルガフ／山本尤・内藤道雄訳　二五七五円
ルソーの世界―あるいは近代の誕生―
J・－L・ルセルクル／小林浩訳　三八一一円
鍋・釜（なべ・かま）―ものと人間の文化史72―
朝岡　康二　二九八七円
歴史のモラル　T・トドロフ／大谷尚文訳　三八一一円
現代ドイツの地域経済―企業の立地行動との関連―
山本　健兒　七〇〇四円
死者の贈り物―ひとはなぜ本を読むか―
D・サルナーヴ／菊池昌実・白井成雄訳　二〇六〇円
サハリン・アムール民族誌―ニヴフ族の生活と世界観―
E・A・クレイノヴィチ／枡本哲訳　六三八六円
神もなく韻律もなく―意識・認識に関するアナーキズム論考―
H・P・デュル／青木隆嘉訳　二九八七円
モンテスキュー―その生涯と思想―
J・スタロバンスキー／古賀英三郎訳　三二九六円
宗教と魔術の衰退・上下
K・トマス／荒木正純訳　上下巻セット　一四九三五円
戦後社会運動資料・第4回配本『民報　東京民報』別巻
法政大学大原社会問題研究所編　B4判新組　一一〇二一〇円
――特別定価九九九一〇円＝本年10月末日まで

■放送大学教育振興会

■明星大学出版部
日本の農村地域社会　高島秀樹　三五〇〇円
世界の教育制度Ⅱ　教育制度の動向・構造　小山俊也　四五〇〇円
渡欧体験の文学　阿部宏　三〇〇〇円

■早稲田大学出版部
ジャン＝ジャック・ルソー―政治思想と文学―
市川慎一編著　三八〇〇円
比較憲法論〔新装版〕
L・ウルフ＝フィリップス、清水望・渡辺重範訳　一八〇〇円
現代政治学の理論　上〔新装版〕　白鳥令編　二八八四円
現代政治学の理論　下〔新装版〕　白鳥令編　二八八四円
現代政治学の理論　続〔新装版〕　白鳥令編　三〇九〇円
たまきはる〔復刻版〕解題付　津本信博編　四八〇〇〇円
源氏物語と平安文学　第3集

早稲田大学大学院中古文学研究会編　九八〇〇円
シリーズ　社会経済史
第3巻　プロト工業化―工業化の第一局面？―
L・A・クラークソン、鈴木健夫訳　一五〇〇円
シリーズ　現代ドイツ文学　全5巻完結
第5巻　女と男の変奏曲―女性作家小説集―
G・ヴォーマン他、奈倉洋子他編訳　二九〇〇円
新しい中国文学　全6巻
第2巻　琥珀色のかがり火　ウロルト、牧田英二訳　二四〇〇円
第3巻　都市の困惑　雀紅一、大村益夫訳　二四〇〇円
水野祐著作集　全10巻
第3巻　日本古代王朝史論各説　下　四五〇〇円
早稲田大学蔵資料影印叢書
第36巻　連歌集(二)　伊地知鐵男編　一八〇〇〇円

■名古屋大学出版会
ワイマル共和国―古典的近代の危機―
D・ポイカート／小野清美・田村栄子・原田一美訳　三六〇五円
眼球運動の実験心理学
苧阪良二・中溝幸夫・古賀一男編　六六九五円
近代世界システム 1600―1750
I・ウォーラーステイン／川北　稔訳　四九四四円
平家物語の成立　山下　宏明　六六九五円
イタリア・ファシズム経済
G・トニオロ／浅井良夫・C・モルテーニ訳　五六六五円

■京都大学学術出版会
アルケー　一九九三（関西哲学会年報）　関西哲学会　一五〇〇円

■大阪経済法科大学出版部
現代社会と唯物弁証法―第二回日中唯物弁証法シンポジウム報告集―大阪経済法科大学出版部・北京大学哲学系共編　四六三五円

■関西大学出版部
青春の変貌―青年社会学のまなざし―　岩見　和彦　一三〇〇円
「怒りのぶどう」を読む―アメリカのエデンの果て―
中山喜代市・中山喜満共訳　一四〇〇円
スポーツの人　大島鎌吉　中島直矢・伴　義孝　二〇〇〇円

■九州大学出版会
プラトン的探究　森俊洋・中畑正志編　三〇九〇円
都市の環境と生活　田中廣滋・山中進編著　三二九六円
現代の生命像　長崎大学生命問題研究会編　二五七五円
統合ドイツの経済的諸問題
九州大学ドイツ経済研究会編　三三九九円
負のエントロピーの世界―生きている状態―
神田　慶也　一八〇〇円
英語・英文学研究の再構築
新村昭雄・安徳軍一・山﨑和夫編　六一八〇円
芸術作品と時間　堀　月子　二二六六円

●大学出版部協会役員（1993年７月１日現在）

幹事長	山下　正	（東京大学出版会／03-3811-4281）
副幹事長	関野　利之	（玉川大学出版部／0427-39-8932）
幹　事（総務担当）	三浦　邦宏	（明星大学出版部／03-3237-3607）
〃　（　〃　）	古菅　昇	（東海大学出版会／03-5478-0891）
〃　（　〃　）	長谷川　甫	（中央大学出版部／0426-74-2350）
〃　（会計担当）	鈴木　吉郎	（早稲田大学出版部／03-3203-1551）
〃　（編集担当）	関野　利之	（玉川大学出版部／0427-39-8932）
〃　（営業担当）	阿部　好文	（法政大学出版局／03-5228-6271）
〃　（広報担当）	小谷　昭夫	（放送大学教育振興会／03-3502-2750）
〃　（　〃　）	小野沢公男	（産能大学出版部／03-3724-9101）
〃　（国際担当）	朝武　清実	（東京電機大学出版局／03-5280-3422）
〃（刊行助成担当）	山下　正	（東京大学出版会／03-3812-2111）
監　事	鈴木　五郎	（慶應通信／03-3451-3168）
常任顧問（日生財団担当主幹）	石井　和夫	（東京大学出版会／03-3812-2111）
顧　問	箕輪　成男	（神奈川大学／0463-59-4111）
〃	田口迪太郎	
〃	中平千三郎	（東京大学出版会／03-3812-2111）
〃	山田　渉	
編集部会（部会長）	小野　朋昭	（東海大学出版会／03-5478-0971）
〃　（副部会長）	佐藤　修	（東京大学出版会／03-3811-0880）
営業部会（部会長）	惣塚　一雄	（東京大学出版会／03-3813-8756）
〃　（副部会長）	松岡　茂和	（東海大学出版会／03-5478-0891）
〃　（　〃　）	鎌田　靖彦	（法政大学出版局／03-5228-6271）
〃　（　〃　）	唐澤　幹雄	（早稲田大学出版部／03-3203-1551）
刊行助成部会（部会長）	渡辺　勲	（東京大学出版会／03-3811-4281）
〃　（副部会長）	三浦　義博	（東海大学出版会／03-5478-0971）
国際担当委員	中陣　隆夫	（東海大学出版会／03-5478-0891）

●20大学出版部代表者及び協会・部会等担当者一覧

	代表者	協会担当	編集部会	営業部会	刊行助成部会
北海道大学図書刊行会	中村　睦男	前田　次郎	成田　和男	管波　秀樹	田宮　治男
聖学院大学出版会	大木　英夫	山本　俊明	荒木　忠義	飯塚　岳夫	山本　俊明
慶應通信	滑川　和男	鈴木　五郎	榎戸　守	飯島　彰生	藤村　信行
産能大学出版部	上野　一郎	小野沢公男	片桐　広行	飯田　栄一	小野沢公男
玉川大学出版部	小原　哲郎	関野　利之	高野　修司	斎藤　勇	成田　隆昌
中央大学出版部	澤島　政夫	長谷川　甫	永井隆三郎	古賀　忠夫	小島　啓二
東海大学出版会	松前　達郎	古菅　昇	小野　朋昭	松岡　茂和	三浦　義博
東京大学出版会	養老　孟司	山下　正	佐藤　修	惣塚　一雄 小山　美和	渡辺　勲
東京電機大学出版局	廣川　利男	朝武　清実	植村　八潮	栗田　佳人	岩下　行徳
東京農業大学出版会	内田　計手	行元　鐵夫	川添　藤三	菊地　弘	藤村　洋
東京理科大学出版会	橘高　重義	後藤　善治			
法政大学出版局	阿利　莫二	阿部　好文	秋田　公士	鎌田　靖彦	平川　俊彦
放送大学教育振興会	宮地　貫一	小谷　昭夫	西村　賢二	鎌田　敏男	加藤　直彦
明星大学出版部	児玉　三夫	三浦　邦宏	丸山とも子	村松　達文	丸山とも子
早稲田大学出版部	奥島　孝康	鈴木　吉郎	寺山　浩司	唐澤　幹雄	新井　善博
名古屋大学出版会	浅井　淳平	伊藤　八郎	橘　宗吾	佐野　雄治	後藤　郁夫
京都大学学術出版会	藤澤　令夫	八木　俊樹	八木　俊樹	日沖　桜皮	八木　俊樹
大阪経済法科大学出版会	山代　義雄	辻　邦夫	中井　太郎	児玉清一郎	辻　邦夫
関西大学出版部	上田　繁潔	井内　雄二	熊　博毅	矢田　敏男	中井　澄
九州大学出版会	原田　溥	平川　晴生	永山　俊二	鳥井　四郎	藤木　雅幸

●製作の現場から　5

ポイントの話
ここが要点（ポイント）

▼仕事柄当然知っているだろうと思われていて、実は知らないということは多い。先日も営業の担当者から「四六判はなぜ四六判なのか」と聞かれて、答えられずに恥をかいた。答えは、四寸×六寸の本が作れる紙の意味。ついでに言えば、菊判というのは、輸入業者が菊のマークをつけて販売したことによるらしい。調べてみればつまらない理由だが、ローマ字のついたA判・B判が日本独自の規格で、菊判・四六判が当初は輸入紙だったというのは面白い。

▼ポイントもそうだ。出版・印刷関係にとってはおなじみの単位だが、その起源は？　規格は？　となれば、答えられない人が多いと思う。かく言う私も今、百科事典を見ながら書いている。それによれば、ポイント制にはディドー式とアメリカ式があり、ディドー式は十八世紀の前半、アメリカ式は後半に制定されている。その規格はいずれも複雑怪奇で、引用したら、たちまちこの欄の紙数を越えてしまう。ややこしいことが大好きな方は、ぜひ百科事典の「活字」の項目を見て頂きたい。

▼起源と経緯は省略して、一ポイントが何ミリになるかというと、ディドー式では〇・三七六ミリ、アメリカ式では〇・三五一ミリになるという（広辞苑）。溜息が出てくるような数値だが仕方がない。歴史のある単位とはそうしたものだ。しかし、それにしても半端ではある。

▼古い単位の換算値は、計算しやすさを考慮して調整する場合がある。たとえば一貫が三・七五キログラムというのは、三・八キロの一貫も、三・七二キロの一貫もあったけれど、四倍して一五キロになる三・七五キロを一貫にあてはめたということらしい（清水義範『単位の話』）。ところが、ポイントに関しては、その発想はなかった。あるいは、あまりにも半端過ぎて、調整しようにもできなかったというのが実態かもしれないが…。

▼それでは、と登場したのが級数である。一級は〇・二五ミリ。ほぼ、ではなく、正確に〇・二五ミリで、完璧にメートル法に準拠している。これは画期的なことだった。われわれ製作担当者の必需品である定規・三角定規、方眼紙、レイアウト用紙はいずれもメートル法に依っている。本そのものの大きさの規格もメートル法だ。写真の大きさを「左右何ポイント」と指定する人はいないだろう。したがって文字の大きさもメートル法であった方が都合がよい。というより、メートル法でなければ、正確なレイアウトは不可能なはずなのだ。倍数尺というものがあるけれど、あれは定規ではない。形はともかく性格的には、一昔前にパチンコ玉を数えるのに使われていた凹凸のある皿のようなものと考えたらほぼ間違いではないだろう。

▼にもかかわらず、ポイント制の電算写植はかなり幅をきかせている。後発のメーカーがポイント制を採用するケースが多いので、むしろ増えつつあるのかもしれない。この『大学出版』も、NECのポイント制の機械で出力している。

▼以前、ユズ編集工房の柚口篤氏のセミナーに参加する機会があった。その際、氏は電算写植のシステムをまず級数制とポイント制に分けておられた。「焼酎の大分類は、醸造法の違いで行なうべきで、一升瓶に入っているか、二リットル瓶に入っているかで分類するのはおかしいのではないか」という意味の私の質問に対して、同氏は「なぜですか？　あなたがた編集者にとって、級数制かポイント制かは大事な問題ではないですか」と答えておられた。大事には違いがないが、システムの大分類としてはやはりおかしい。ただ、この分類法は、私とは逆の意味で、級数かポイントかにこだわる編集者が多いことを示しているように思われた。なぜなのだろう。ポイント至上主義者の意見を聞いてみたい。（級数命）

ISSN 0913-3305

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362 埼玉県上尾市戸崎1－1 TEL. 048-781-0031 FAX 048-726-2962
慶應通信	〒108 東京都港区三田2－19－30 TEL. 03-3451-3584 FAX 03-3451-3122
産能大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘2－16－5 自由が丘サンビル TEL. 03-3724-9101 FAX 03-3717-4346
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園6－1－1 TEL. 0427-39-8935 FAX 0427-39-8940
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742－1 TEL. 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151 東京都渋谷区富ヶ谷2－28－4 TEL.03-5478-0891 FAX 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷7－3－1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町2－2 TEL. 03-3291-9665 FAX 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘1－1－1 TEL.03-5477-2562 FAX 03-5477-2643
東京理科大学出版会	〒162 東京都新宿区若宮町19 TEL. 03-3235-5692 FAX 03-3235-9632
法政大学出版局	〒162 東京都新宿区市谷田町2－14－1 TEL. 03-5228-6271 FAX 03-5228-6010
放送大学教育振興会	〒105 東京都港区虎ノ門1－14－1 郵政互助会琴平ビル4F TEL. 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保2－1－1 TEL. 0425-91-5115 FAX 0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町1－103 TEL. 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-01 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX 075-761-6182
大阪経済法科大学出版部	〒581 大阪府八尾市楽音寺6－10 TEL. 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564 大阪府吹田市山手町3－3－35 TEL. 06-388-1121 FAX 06-389-5162
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎7－1－146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX 092-641-0172

大学出版(第18号)'93夏　平成5年7月1日発行　発行所　大学出版部協会
〒113 東京都文京区本郷7丁目3番1号東大構内　東京大学出版会内　電話 03-3812-2111 (内)7954
頒布価格100円(本体97円)〒共